

市民のページ

お届けします 「八重の桜」通信



2013年の大河ドラマで、会津藩士の娘・新島八重を主人公にした「八重の桜」が放送されることになりました。ここでは、新島八重に関する歴史やドラマに關連することなどを紹介していきます。

その1 八重と山本家

新 島八重(山本八重)に ついて、どのくらいの人を知っているでしょうか。あまりよく知らないという人も多いと思います。八重は、戊辰戦争のとき、男装して銃を片手に戦ったことから、「幕末のジャンヌダルク」と呼ばれている女性です。全国的には夫である新島襄と同志社英学校、現在の同志社大学の創設に力を尽くしたことで知られています。これには八重の兄・山本覚馬も大きな働きをしました。八重は1845年(弘化2年)に生

まれ、87歳で亡くなりましたが、26歳までを会津で過ごしています。このコーナーでは、そんな八重について連載で紹介していきます。**覚** 馬・八重の山本家は、甲斐国、武田信玄の軍師・山本勘助の遠縁といわれています。しかし、どこからこの説が出てきたのかは分かりません。系図で見ると、山本家の初代・佐平良永の出身も近江国で、甲斐国ではありません。

八 重は、鶴ヶ城の西側、現在の米代二丁目辺

りに住んでいました。城の外側を外堀で囲った内側を郭内といいましたが、八重の住んでいた郭内には、日新館や藩の役所のほか、上級武士だけの屋敷が置かれていました。

八 重の父・権八は会津藩の砲術師範役として仕える上級武士でした。権八と妻・さくには三男三女がいましたが、男女二人は早くに亡くなっています。母親のさくは、大変賢明な人で、会津藩の婦人の中でも先駆者であったといえます。当時、天然痘が非常にはやっていましたが、さくは積極的に近所の頑固者を説得して、自宅で天然痘の免疫をつくるための予防接種を施したそうです。覚馬・八重兄弟に先見性があったのも、この母の影響もあったようです。また、山本家は来客の多い家で、これもさくのもてなしが行き届いていたからだといわれています。



46歳ごろの八重(同志社大学提供)

戊辰戦争では銃を持って戦い、新島襄と結婚してからは洋服を着るなど、当時の一般的な女性と比べると個性的な存在であった新島八重。物おじせず快活な気質で、生まれつき男まさりな女性であったといわれています

▼監修…会津歴史考房 主宰・野口 信一さん